



MSA-001

So Nice Duke Duke Jordan Trio



Duke Jordan (ピアノ)
Jesper Lundgaard (ベース)
Aage Tanggaard (ドラムス)

針を落とした瞬間、あの時代の熱が伝わる ～ 高まる期待を煽るような臨場感を聴こう

2017年6月 東京都 生島昇様

1970年代からリアルな日本のジャズシーンを活写してきた TBM (スリー・ブラインド・マウス) レーベルには、例外的に海外アーティストのリーダー作が2枚存在する。その中のひとつがこのアルバムだ。同レーベルと関わりの深いサクソ・プレーヤーの森剣治氏が経営する名古屋のジャズ・スポット「ソー・ナイス」で、1982年に3度目の来日を果たしたデューク・ジョーダン・トリオをライブ・レコーディングしたものである。この当時、デンマークのステープルチェイス・レーベルで精力的にアルバム制作を行っていたジョーダンは、再び音楽的なピークを迎えようとしていた。この時代の日本のジャズファンには、70年代に巻き起こったニュー・ジャズと呼ばれる前衛的なムーブメントと、後にフュージョンと呼ばれるクロスオーバーの流行という対極の変化を通過して、いま一度メインストリームを求めていた空気があった。新旧のジャズファンが入り交じり、「本物」を渴望する熱気が高まっていた。ビッグネームの来日公演ともなれば、大ホールでのツアーが当然だったし、いま振り返ると信じられないほど多くの人々がジャズに熱狂していた時代だった。さらにブームは巨大化して大規模なジャズの野外フェスが次々と開催されるようになっていく。そのままバブルに突入していくのだがその先の話は置いておこう。

1982年は、シーンが肥大化し産業化され尽くす寸前の美しい時代だった。モダンジャズ黄金時代を飾ったジャズメンの多くが現役だったし、来日公演も盛んだった。奇跡のカムバックを果たしたマイルスの復帰ツアーも前年から始まり、かくいう私も新宿西口での野外ステージで初めてマイルスを見た興奮をいまでもはっきりと覚えている。アーティストにも、リスナーにも、研ぎ澄まされた期待と熱気が充満していた。至近距離でのジャズ・クラブでの演奏はさらにそのテンションを加速させた。このアルバムは、まさにその時代の濃密で幸福な空気がそのまま詰め込まれている。針を落とした瞬間から、あの時代の熱が一気に部屋を埋め尽くすのだ。高まる期待を煽るかのように禁欲的なピアノ・ソロから始まるジョーダンの演奏は、リラックスしたクラブの空間に強力な磁力を持った音粒を放ち、あっという間にリスナーの耳をひとつに集めてしまう。「二人でお茶を」の柔らかなテーマが現れる頃には、会場の鼓動がジョーダンの指先に集中し張りつめていく空気が体感できる。

それほどストレートで臨場感に満ちたこのアルバムを、いま再びアナログレコードで味わえることは大きな意味がある。かつてのアナログ技術を支えていたエンジニアの経験値とハードウェアのノウハウは多くが散逸し、現代では過去のテクノロジーをパラメーター化してソフトウェアで再現を試みるデジタル・マスタリングが主流だ。それにも大きな成果はあるのだが、ことアナログレコードの復刻となると合理性や均質化だけでは終われないサムシングが求められてしまう。世界的なサウンド・クオリティを誇るコンパックの Harmonix がリリースするからには、そこに妥協があるはずがない。これは満を持して送り出された渾身のマスター・サウンド LP なのだ。

2曲目の「スターダスト」も、観客の耳を一身に集めたまま、ソロ・ピアノで続けられる。ケレン味のない端正に選び抜かれた音粒が、スイートな旋律の上を滴るように転がっていく。ありふれた名曲が、非凡な名演に昇華する瞬間が見える。60歳のジョーダンはそのキャリアだけが成せる魔法を使う。最初のソロ2曲で、リスナー全員の耳を感度最大にしてしまうのだ。そして、徐々にトリオへ発展していき、自らの代表曲「ジョー・ドゥ」、「キス・オブ・スペイン」と突入すると、迷うことなく会場の熱気も一気にヒートアップし、トリオが一体となってスイングを解放する。ここがまさしく本作のクライマックスだ。ダイナミクスに満ちたプレイを抑え込まずにそのまま捉えたサウンドからは、緩急に富んだ円熟のフレーズがニュアンスたっぷりに聴こえてくる。ともすれば耳当たり良く聴き流してしまうこともあったこのアルバムが、当時の会場に満ちた熱気ごと味わえるサウンドによって、かけがえのない名演のドキュメントであることにいまさらながら気づかされる。そして、なぜかアナログレコードはその温度を少し高めに伝えてくれるのだ。その僅かな加温が、アナログのサムシングだということにしておきたい。

我が家に DUKE JORDAN TRIO に来て貰い Live 演奏をして頂きました

2017年6月 宮城県仙台市 アダージョオーディオ 富川三夫様

いや? 凄かったです

こんな勘違いをするぐらいのレコードを聴いてしまいました。

A面1曲目の頭にノイズが入っていると書いて有ったが感じませんでした。ピアノソロが始まって直ぐ背筋がゾクッとするような音が飛び込んできます、張りの有る弦の音と空気感がすぐそこで演奏しているように漂っています。

究極の音質を求めて 長年コンバックが求めていた音質の LP が満を持して発表されました。原版は 2002 年にスリー・ブラインド・マイス (TBM)から発売された CD で自分のコレクションを探してみたら購入していました。Harmonix Master Sound LPとオリジナル TBM の CD を聴き比べてみると LP がオリジナル版で CD が再発版のような印象です。全曲を通して聴いてみた感想はデジタル機器に上質のワードクロックを供給し更に 10M を接続し同期させたような音質で、でも音楽性が薄くなっていない初めて体験した LPレコードです。

楽器間の分離は勿論のこと奥行き感や上下のバランスも整っていて音楽の S/N が良いので録音時の空気感まで聴き取れます。フレットレスベース固有の弦の響きとスライドした時のリアルな音は PA なし会場の最前列で聴いているような感じでゾクゾクします。

LP-12 AT-ART2000 U・BROS-5 を全てバランス伝送で更に U・BROS-5 はオープンタイプなので解放感抜群でまるで Live 会場にでも居ようです。Live 版とスタジオ版が出て居たら絶対 Live 版を購入する Live の空気が大好きな自分の音楽感性にピッタリな一枚です、スタジオ録音好きなアナログ LP マニアにも絶対納得できる一枚とお勧めいたします。

2002 年頃の音源を再マスタリングし現代の技術でこのように蘇るなら Combak 社の人派で多数の名演奏版を蘇らせて頂きたいと願います。一緒に聴いた友達 A 君の希望は「Premium ヴォイセス」シリーズを全て Harmonix Master Sound LP で出して貰いたいとハイトーンで興奮していました。

最近の LP は 180g 重量版が多く 180g であれば全て高音質と勘違いしている方が多くいらっしゃるのも確かです。音質は重量だけでは決まりませんが重い方が有利な事も確かです、普通の 180g 高音質版と Harmonix Master Sound LP を聴き比べて下さい。考えさせられるものが有ります。

まるでライブ会場の真ん前に居るかのような体験です

2017年6月 宮城県塩釜市 Music Bar スティーブ マスター 高橋様 (現役ドラマー)

手に持った時の重量感まさにいい音がするなと針を落とすと期待通りのクリアかつ奥行き感が! スネアの響き線一本々が躍動してトップシンバルはなおかつクリア。ベースの弦がネックに弾ける音までも緻密に聞こえてくる様は、まるでライブ会場の真ん前に居るかのような体験です。大変素晴らしいアナログ盤です!

本日 SO NICE DUKE の LP 届きました

2017年6月 愛知県豊橋市 T 様

LP は早速聞きましたが、音、構成とも期待以上でした。以降の企画にも期待しております。